

報告(2)

「社会的包摂に向けた予見的支援の研究」



土田 宣明
(文学部教授)

よろしくお願いします。それでは社会的包摂に向けた予見的支援についてご報告します。立命館大学文学部の土田と申します。

まず、予見的支援チームについて紹介します。我々のチームの研究ではインクルーシブ社会に向けて、特に高齢者のウェルビーイングを対象とする実践的、基礎的な研究を、実証性を重視で遂行しています。

予見的支援チームの研究には柱が2本ほどあります。一つは高齢者支援の研究、もう一つは加齢にともなう高次の精神機能の変化、いわゆる基礎的な研究です。まずは高齢者支援の方の研究ですが、認知症や鬱予防の取り組みにおいて、大学を地域資源としてどのような援助の可能性、援助の提供が可能かということを検討しています。2本目の柱では、高齢者の環境面を設定し援助するには何が重要なのかという問題を検討するために基礎的な資料の収集を目的として、加齢は人間の精神機能にどのような変化をもたらすのかを検討しております。

今年度の研究成果につきましては、例えば、高齢者支援に関しては鬱予防プログラムが認知機能に影響するかどうかということを検証的に検討しました。それから2番目の柱であります加齢に伴う高次精神機能の変化につきましては、高齢者の運動コントロールに関する実験的基礎的な研究を実施しました。ある程度、成果が見られましたので、これについて簡単にご報告したいと思います。

まず、1番目の柱の方の研究報告ですが、鬱予防のプログラムが認知機能に与える影響についてです。生きがい創造プログラムという同志社女子大学、京都府立医科大学、立命館大学の共同研究に参加しました。我々のグループは特に認知面での測定を担当しました。

プログラムの内容について、簡単に触れさせていただきますが、全体で、10セッションほどで、2カ月～3カ月にわたるグループディスカッションを中心

としたセッションを取り組みました。

プログラムの効果検証については、プログラムの制限上、1グループ15名程度という制限がありましたので、またスタッフの数と会場の都合上、今年度は3グループの設定が可能でした。応募された方々をランダムに3つのグループにわけ、1グループを待機群として設定しました。

実際の査定方法としましては、ファイブコグというような集団の認知機能検査を用いて効果検証をしました。注意、分割、エピソード、記憶、視空間認知、言語検索、抽象的思考能力の、5つの側面を測定する検査です。実際に効果測定をした結果、エピソード記憶のみ、介入の効果が確認されました。具体的に申しますと、待機群の方は、プレで、2回査定を行いました。有意な変化はありませんでした。介入した方では、エピソード記憶のみに変化が確認されました。大きな効果量も確認されました。まだ途中経過なのですが、1番目の研究成果のまとめとしましては、言葉を使うエピソード記憶の改善に効果が見られたのではないかと考えられました。生きがい創造プログラムは言語を頻繁に取り組みするようなプログラムであったこと、また、生きがい創造プログラムでは、社会的な関わりを促進していること、この2点がエピソード記憶の改善を引き起こした可能性があるのではないかと現段階では考えて、引き続き検討しております。

研究報告の2番目です。2本目の柱でありますのは、加齢に伴う精神機能の変化について検討するという問題でした。この研究の背景にありますのは、例えばアクセルとブレーキの踏み間違いのような事故の問題です。高齢者は重大事故につながる事が非常に多いと言われています。しかし、ある企業の調査によりますと、踏み間違いというのは高齢者特有の問題ではなかったようです。

スライド11の図にありますように20代でも非常に多い現象でした。それではなぜ高齢者でこのような重大事故につながる人が多いのでしょうか。

人間の心理のプロセスはいくつかあるかもしれませんが、簡単に申しますと、情報を受けとって、次に判断を下して、それを実行するという3つのプロセスに分けるならば、運動を抑制する面での加齢の影響もあるのではないかと今考えて、いくつか実験をしています。

スライド13のグラフはその中の実験結果の一つです。詳しくは先ほどのポスターセッションで報告いたしましたので省略させていただきますが、簡単に言ってしまうと、大学生のグループは様々な条件を設定したのですが、ほ

とんど影響がありませんでした。ところが高齢者のグループを見ますと、視覚的な刺激は統制したにもかかわらず、エラーの発生率に大きな影響を与えていました。このような実験をいくつか条件を変えながら検討しております。

まだ研究は継続中ですが、今のところ、こういうことが言えるのではないかと思います。高齢者にとって運動性の神経興奮が行動抑制に強く影響する可能性があること。これまでは認知面での研究が多かったのですが、判断を下した後の実行する段階での問題が様々な側面に強く影響しているのではないかと考えております。モーターレベルでの基礎研究の必要性を示唆しているのではないかと思います。

予見的支援チームの今後の予定ですが、認知症や鬱病予防、それから高齢者の事故防止を念頭に置きながら高齢者支援、加齢にともなう高次精神機能の変化について実証性を重視した取り組みを継続的に実践したいと思います。来年度も引き続き実践していきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

稲葉 土田先生、どうもありがとうございました。次に社会的包摂に向けた伴走的支援の研究ということで谷晋二先生にご発表をお願いいたします。

予見的支援チームの研究

インクルーシブ社会に向けて、
特に高齢者ウェルビーイングを対象と
する実践的・基礎的研究を、実証性
重視で遂行している。

1

予見的支援チームの研究

- 1) 高齢者支援
→ 大学を地域資源として、どのよう
な援助の提供が可能か
- 2) 加齢に伴う高次精神機能の変化
→ 加齢は、人間の精神機能に
どのような変化をもたらすか

2

今年度の研究成果

- 1) 高齢者支援
→ うつ予防プログラムが認知機能
に影響するかどうかを検証した。
- 2) 加齢に伴う高次精神機能の変化
→ 高齢者の運動コントロールに
関する基礎的研究を実施した。

3

研究報告1

うつ予防プログラムが認知機能に与える影響

【研究背景】
「生きがい創造プログラム」(代表: 日下菜穂子)
(同志社女子大学・京都府立医科大学・立命館
大学の共同研究)の実践。

4

プログラムの内容

全体で10セッション

- ① 自分を捉えなおす
- ② 人生の目標を見つける
- ③ 人生目標の実現に向けて
- ④ 人とつながる
- ⑤ 人生目標を追求する

5

プログラムの効果検証

介入 Pre — Post
待機 Pre1 — Pre2

介入群30名(男性7名, 女性23名),
統制(待機)群15名(男性5名, 女性10名),
平均年齢74.1歳。
軽度うつに該当する人が19名いた

6

査定方法

手先の運動スピードを測定する「運動機能」に加え、5つの側面の認知機能が測定できるFive Cogを実施した。

- ①「注意分割機能」
- ②「エピソード記憶」
- ③「視空間認知機能」
- ④「言語検索機能」
- ⑤「抽象的思考能力」

7

結果


表1 介入前後の変化(素点の平均値と標準偏差)

	運動機能	注意分割機能	エピソード記憶	視空間認知機能	言語検索機能	抽象的思考能力
介入前	24.5(5.6)	20.1(10.2)	15.4(4.8)	6.4(0.4)	16.5(4.1)	11.1(2.9)
介入後	27.1(5.4)	23.1(10.1)	19.2(5.4)	6.9(0.2)	17.7(4.3)	11.4(2.7)

***p<.01

8

効果測定のまとめ

介入 pre  post

エピソード記憶にのみ有意差がみられ、大きな効果量が確認された

待機 pre1  pre2

有意差なし

9

まとめ

- 介入前後の認知機能の変化を分析した結果...

言葉を使うエピソード記憶の改善に効果がみられた

- ①生きがいの創造プログラムは言語を頻繁に使う取組であること
- ②生きがいの創造プログラムでは、社会的な関わりを促進していること
この2点がエピソード記憶の改善を引き起こした可能性があるのでは?

10

研究報告2

高齢者の運動抑制に関する基礎研究
【研究背景】

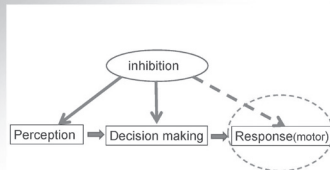


しかし...

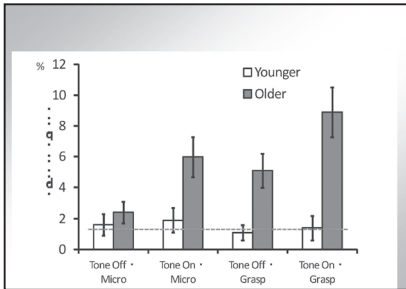


11

運動抑制面での加齢の影響があるのでは?



12



13

研究成果(継続中)

高齢者にとって、運動性の神経興奮が、行動の抑制に、強く影響する可能性あり。

↓

Motorレベルでの基礎研究の必要性を示唆
(自動車運転や機器類の操作などで)

14

まとめ

- 1) 高齢者支援
- 2) 加齢に伴う高次精神機能の変化

について実証性を重視した取り組みを継続的に実施している。

15